

群 教 セ	M01 - 01
	平 24. 246 集

児童の規範意識に関する調査研究

― 道徳の時間における規範の内面化に着目して―

長期研修員 木暮 聡美

《研究の概要》

本研究は、教師及び児童を対象に、児童の規範意識に関する実態調査や道徳の時間の指導に関する調査を分析することで、児童の規範意識をはぐくむための道徳の時間における有効な指導を統計的に明らかにしようとするものである。具体的には、道徳の時間において、他者とのかかわりを意識させ規範の内面化を図ることが規範意識をはぐくむ上で有効であることを明らかにする。そして、内面化を図る道徳の時間の指導の在り方を提言する。

キーワード 【調査研究 小学校 道徳の時間 規範意識 規範の内面化】

I 研究の背景と目的

1 現状と課題

群馬県教育振興基本計画（平成21年3月）において、人間関係の希薄化が規範意識の低下を生む要因となっていると指摘している。学校では、規範意識の低下による学級集団の規律の乱れ、いじめや不登校、暴力行為など様々な問題が表出している。また、青年期に入るとそれまで他律的に形成されてきた規範意識が揺らぐ傾向にあり、規範の意味や意義を考えさせる指導が求められている。

文部科学省「児童生徒の規範意識をはぐくむための教師用指導資料」によれば、規範意識とは「人間として従うべき価値判断の基準（規範）を守り、それに基づいて判断したり行動したりしようとする意識」であるとされている。

小学校学習指導要領解説道徳編（以下、道徳編と記す）において、社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識を小学校段階からしっかりと身に付けさせていくことが求められている。平成18年度群馬県総合教育センターにおける先行研究の結果から、「規範を守ろうとする意識と規範を守る行動は強く関連する」ことが明らかになった。国立国会図書館調査「青少年をめぐる諸問題」によると、規範が内面化されたとき、外的な強制力によって遵守されるのではなく、規範の理解を伴った自発的な欲求として遵守されるようになり、内面化された規範が表出したものを「規範を守る行動」ととらえれば、学校教育に求められているのは、規範の内面化を図るための教育的アプローチであることが分かる。また、国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官の滝 充は、教師が規範を教え込むことは単なる知識になってしまい、中味のない規範意識の空洞化を招くと述べている。これらのことから、道徳の時間において意識に働きかける規範の内面化を図ることが、規範行動の変容の一要因になると考える。

平成20年中央教育審議会答申において、「他者に共感することや社会の一員であることを実感することにより規範意識がはぐくまれる」ことを明記している。道徳編においては、「道徳は、他者とのかかわりにおけるよりよい生き方を求めるものである」とある。

これらのことから、道徳の時間において規範意識をはぐくむには、規範を自分とのかかわりでとらえさせ、他者とのかかわりを意識させた指導を行うことが、心の内面に規範を働きかけることに有効であると考えられる。

しかし、道徳の時間において規範の内面化を図る具体的な指導方法についての調査研究は行われていない。

以上のことから本研究では、規範の内面化を取り上げた道徳の時間に視点をあて、児童一人一人が、規範そのものがもつ価値を十分理解し、「規範を守る行動」に移そうとする道徳的実践力をはぐくむための指導方法の実施状況を調査、分析する。児童の規範に関する意識や行動の実態及び道徳の時間に規範意識をはぐくむ意識が高い教師の規範の内面化を図るための具体的な指導方法を統計的に明らかにし、規範意識をはぐくむ指導の在り方を提言する。

2 研究の目的

道徳の時間において児童の規範意識をはぐくむためには、他者とのかかわりを意識させ、規範の内面化を図ることが有効な指導方法であることを明らかにする。

II 仮説

道徳の時間において、児童の規範意識をはぐくむ意識の高い教師は、他者とのかかわりを意識させた指導を通して、規範の内面化を図っているだろう。

III 調査対象

群馬県内の公立小学校339校から多段抽出法により、31校を無作為抽出。そこから6年生児童950名（誤差5%、信頼度95%とした場合377名）、及び通常学級担任教師404名（誤差5%、信頼度95%とした場合352名）を抽出。調査は、4段階評定尺度を用いた郵送による質問紙調査を実施した。

IV 調査内容

1 調査の基本的な考え方

道徳編において、「道徳教育においては、法律的な規則やきまりそのものを取り上げるだけでなく、それらの基盤となっている道徳的な生き方を問題にするという点に留意する必要がある」とある。約束やきまりは守るべきものという指導だけでなく規範を守ること、よりよい人間関係や集団生活を送っていけるようにすることを目的としている。約束やきまりを大切にすることを児童の発達の段階に合わせながら、その意義を考えさせることが大切であると考え。

本研究の道徳の時間における規範の内面化を図1に示した。児童は、日常生活を送るなかで、他者とかかわりながら様々な規範に触れ生活している。道徳の時間では、知識でしかなかった規範を問題意識としてとらえ、資料の登場人物の行動や思いについて、役割演技や動作化、話し合い活動など友達とかかわりを持ちながら、自分自身を客観的に見つめたり、他者を受容したりすることで、自発的に規範のもつ意味や必要性を理解していく。集団の中で規範を守るとは生活をよりよくするもの、人間関係を豊かにするものという他者とかかわりを意識することで、日常において「規範を守る行動」を実践しようという意欲や態度につながっていくものと考え。

社会学者 小宮友根は『エスノメソドロジー 人々の実践から学ぶ』第5章「規範があるとは、どのようなことか」において、規範がその人の行為を決定させているとし、外側から制約されるだけでは従えない人も、自ら「～したい」と望めばその気持ちに従い規範は守られ、これを規範の内面化としている。人々が同じ規範を内面化しているからこそ社会秩序が保たれていると述べている。

本研究は、規範の必要性を理解し、日常生活において進んで規範を守る行動がとれる児童を内面化している児童ととらえ、質問項目を検討した。小学校最終学年である6年生がはぐくんできた規範の育ちをはかるために、規範意識と規範を守る行動から内面化の実態を明らかにし、規範の内面化の方策を探る。また、教師には、道徳の時間における規範をはぐくむ指導の実態及び道徳の時間の規範指導にどのような指導方法を取り入れているか統計をもって明らかにする。

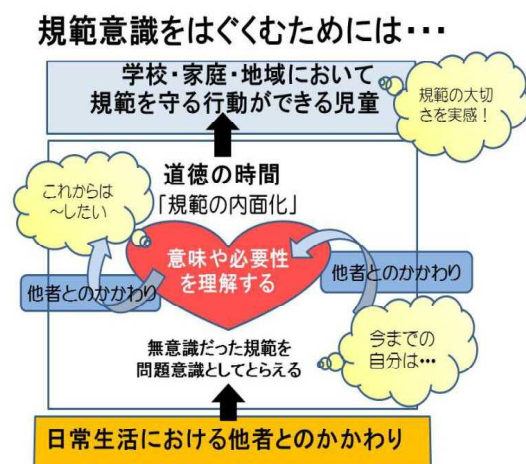


図1 道徳の時間における規範の内面化

2 具体的な調査内容

調査票は以下の質問項目によって構成されている。

(1) 児童用調査

- ・児童の規範を守る行動の実態調査
- ・児童の規範に対する意識調査
- ・道徳の時間に関する意識調査

(2) 教師用調査

- ・道徳の時間における規範意識をはぐくむ指導の実態調査
- ・道徳の時間における規範意識をはぐくむ指導方法の有効性と実現度

V 調査の実施

1 調査分析の視点及び方法

- 道徳の内容項目にかかわる児童の規範意識と規範を守る行動から、単純集計とともにクロス集計や χ^2 検定により、意識と行動の差が大きい内面化されていない内容項目を判断する。また、内容項目間の関連性や影響を調べる。
- 児童の道徳の時間に関する意識と内面化の関連性や、道徳の時間が内面化に与えている影響を調べる。
- 道徳の時間において規範の内面化を図る上で有効であると考えられる指導方法とその実施状況を単純集計する。
- 道徳の時間において規範意識をはぐくむ意識の高い教師の指導の実施状況を χ^2 検定により有意差を明らかにし、よく行っている指導方法を判断する。

2 調査項目の選定（質問文は資料編 1～4 ページ参照）

(1) 規範にかかわる重点事項と道徳の内容項目

道徳編「指導内容の重点化における配慮と工夫」の項では、各学年で配慮したい規範にかかわる重点事項を挙げている。道徳教育と規範意識のかかわりから考えると、道徳的価値の自覚を深めることは規範の意義や必要性に気付くことにつながり、道徳的実践力が育つことは道徳的実践となる「規範を守る行動」に結び付くものと考ええる。そこで本研究では、規範にかかわる重点事項を道徳の内容項目に当てはめた質問項目を設定した（表 1）。

表 1 規範にかかわる各学年段階で配慮したい重点事項と道徳の内容項目

学年	重点事項	内容項目
低学年	あいさつなどの基本的な生活習慣 善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないこと	1ー(1)基本的な生活習慣 4ー(1)規則尊重・公徳心 1ー(3)正義
中学年	集団や社会のきまりを守ること	4ー(1)規則尊重・公徳心
高学年	法やきまりの意義を理解すること 相手の立場を理解し、支え合う態度を身に付けること 集団における役割と責任を果たすこと	4ー(1)規則尊重・公徳心 4ー(2)公正公平・正義 2ー(2)思いやり 1ー(3)自律 4ー(3)役割・責任

また、重点事項と規範意識の育ちの関係性を図 2 に示した。規範意識は、身近な集団から広く社会へと周りの人とのかかわりを持ちながら広がり高まっていく。また、「大人が言うから守る」という考えから「自分自身の考えで守る」というように他律から自律へ高めていく必要がある。発達段階や実態を考慮しながら、規範の内面化をしていくことが大切であると考えられる。そこで、小学校最終学年である 6 年生の規範意識の育ちの実態を調査し、規範の内面化の実態を明らかにする。

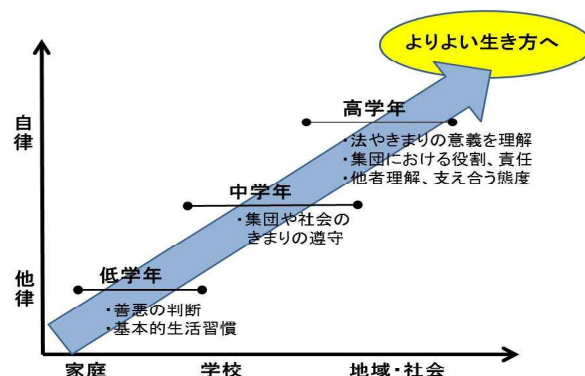


図 2 重点事項と規範意識の育ち方

(2) 児童用調査項目

規範意識・規範を守る行動ともに、規範指導の重点事項を道徳の内容項目に当てはめた「基本的生活習慣」「規則尊重・公德心」「勤勉努力・自律」「公正公平・正義」「思いやり」「役割自覚・責任」の六つの内容項目に関する質問を三つずつ設定した。「時間を守って行動することは大切である」「授業の始まりには席に着いている」のように規範意識と規範を守る行動が対応するようし、規範を守る行動の質問項目は、具体的な場面が想定できるよう留意した。

また、6年生になってからの自分自身を振り返って回答するよう条件を付けた。

【調査項目】意識18項目・行動18項目・道徳の時間における意識4項目、全40項目

(3) 教師用調査項目

はばたく群馬の指導プランを参考にし、規範意識をはぐくむための指導方法を設定した。

【調査項目】指導の実態4項目・指導方法の有効性と実現度16項目、全20項目

VI 研究の結果と考察

1 児童の規範意識と規範を守る行動の実態から

(1) 内容項目の割合及び χ^2 検定の結果

(資料編A～D参照)

図3は、規範意識と規範を守る行動を内容項目ごとにまとめ、割合で表したものである。規範意識は、どの内容項目も大切であると答えた割合が90%以上と高い。行動は、「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」が、行動の平均77%を下回っている。しかも、他の項目より意識と行動に差があることがわかる。

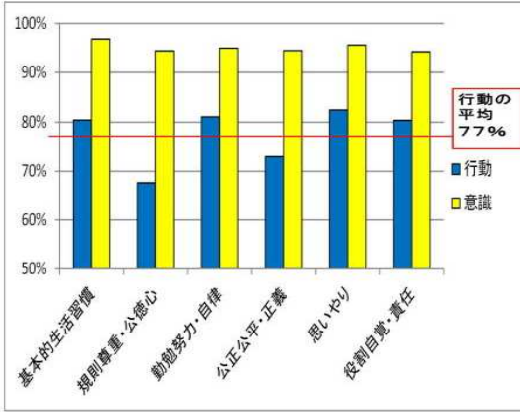


図3 内容項目ごとの意識と行動の割合

表2の規範を守る行動の χ^2 検定からも「規則尊重・公德心」に関する質問項目「登下校時、歩道を一人で歩いている」「教室や廊下に落ちているゴミを先生に言われなくても拾っている」「廊下を走っていない」、「公正公平・正義」に関する質問項目「悪口を言っていない」「仲間はずれや意地悪をしているのを見たとき、注意している」で、「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」が有意に多く、できていない児童が多い。「仲間はずれをしていない」は「よくあてはまる」が有意に多い結果が出ている。また、意識「仲間はずれをしない」ことを「大切である」と答えた児童も有意に多く、意識と行動の差が少ない。

表2 児童の規範を守る行動 χ^2 検定の結果

道徳の内容項目	番号	質問項目	よく当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
規則尊重・公德心	4	わたしは、登下校の時には、一列に並んで歩道を歩いている。	303 +	337 ▽*	187 ▲**	52 ▲**
	5	わたしは、教室や廊下に落ちているゴミを先生に言われなくてもひろっている。	75 ▽**	312 ▽**	382 ▲**	110 ▲**
	6	わたしは、ろうかを走っていない。	138 ▽**	405 ▲**	269 ▲**	67 ▲**
公正公平・正義	10	わたしは、友だちの悪口を言っていない。	266 ▽**	405 ▲**	172 ▲**	36
	11	わたしは、仲間はずれをしていない。	542 ▲**	271 ▽**	51 ▽**	15 ▽**
	12	わたしは、友だちが仲間はずれやいじめをしているのを見たとき、注意している。	176 ▽**	394 +	255 ▲**	54 ▲*

$\chi^2(51)=2061.446$, $p<.01$ $\Phi=0.208$

注：計算上の予定数に比べて有意に多かった場合には▲、有意に少なかった場合には▽で表されている。激しい有意差の場合($p<.01$)には**、有意差の場合($p<.05$)には*、有意傾向の場合($.05<p<.01$)には+で表されている。

(2) 規範意識と行動の関連性

意識と行動をそれぞれ合計し、「行動ができる・できない」「意識が高い・低い」に分け、クロス集計によるフィッシャーの正確確率検定を行った(表3)。

統計処理ソフトの結果に**が付くことから「意識」と「行動」は高い関連性があると証明された。

表3 規範意識と行動の関連性

	意識が低い	意識が高い
行動ができない	30人	259人
行動ができる	3人	587人

$\Phi=0.244$

両側検定: $p=0.0000$ ** ($p<.01$)

(3) 内容項目ごとにみたクロス集計による χ^2 検定の結果

内容項目ごとに意識と行動をクロス集計し χ^2 検定した結果が表4である。「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」では、意識が高く行動もできる児童が有意に少なくなっている。また、「規則尊重・公德心」では、意識は高いが行動できない児童が有意に多くなっている。

表4 意識と行動のクロス集計による χ^2 検定による比較

	意識が高い・行動できる	意識高い・行動できない	意識低い・行動できる	意識低い・行動できない
基本的生活習慣	709 ▲**	149 ▽**	3	18
勤勉努力・自律	685 ▲**	168 ▽**	2	24
思いやり	701 ▲**	154 ▽**	6	18
役割責任	673 ▲**	173 ▽**	8 +	25
規則尊重・公德心	391 ▽**	455 ▲**	2	31
公正公平・正義	602 ▽*	243	5	29

$\chi^2(15) = 443.791$, $p < .01$ Phi=0.167

(4) 重回帰分析から分かる「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」に影響を与える要因

児童の意識と行動の実態から課題のある「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」に影響を与える要因について調べた。表5から、「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」ともに、他の内容項目と強い相関関係にあることがわかる。その中でも特に影響を与えている項目を調べるために重回帰分析を行った。その結果が図4である。「規則尊重・公德心」の規範意識に最も強い影響を与えているのが、「基本的生活習慣」である。次に「勤勉努力・自律」が強い影響を与えている。「公正公平・正義」の規範意識に最も影響を与えているのが「思いやり」、続いて「勤勉努力・自律」が強い影響を与えている。どの内容項目も**がつくため、影響を及ぼす可能性が高いことを示している。規範意識にかかわる六つの内容項目が「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」に影響を与えていることがわかる。

表5 「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」と他の内容項目との相関関係

規則尊重・公德心の規範意識と相関関係が強い規範意識				
思いやり	勤勉努力・自律	基本的生活習慣	役割自覚・責任	公正公平・正義
0.742473	0.742408	0.736545	0.720757	0.719922
公正公平・正義の規範意識と相関関係が強い規範意識				
思いやり	勤勉努力・自律	規則尊重・公德心	役割自覚・責任	基本的生活習慣
0.743733	0.720420	0.719922	0.695656	0.675960

0.7以上の相関係数は強い相関関係がある。

$p < .01$

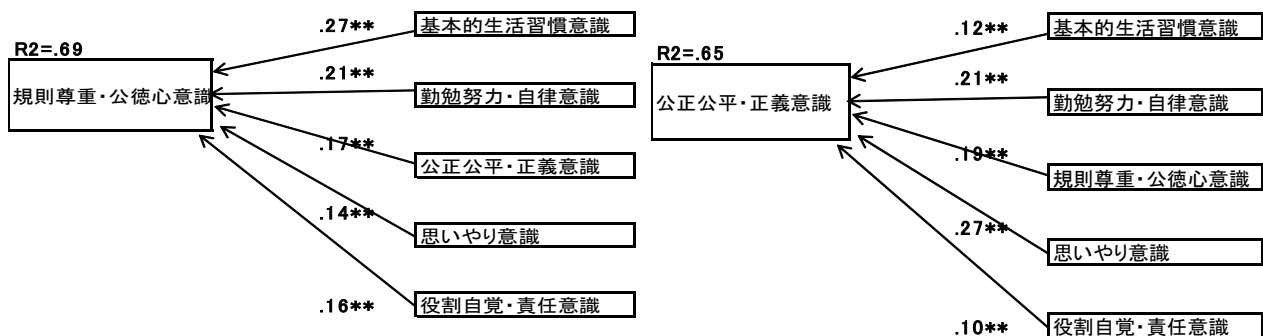


図4 「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」への影響関係と影響度(パス図)

注：数値は影響度の強さを示す標準回帰係数

(5) 考察

「規範を守ろうとする意識と規範を守る行動は強く関連する」という平成18年度群馬県総合教育センターの報告が、統計学のクロス集計によるフィッシャーの正確確率検定からも裏付けられた。本研究において、規範意識が高く規範を守る行動もできる児童は、規範の価値の理解を伴って自律的な意識によって規範的な行為を行うことができる、規範を内面化した状態であるとらえる。表4から「基本的生活習慣」「勤勉努力・自律」「思いやり」「役割自覚・責任」においては内面化している児童が多くなっている。しかし、「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」においては、内面化している児童が少ないことが分かる。

規範を守る行動ができない児童には、規範意識が低いから行動ができないグループと、規範意識が高くても行動が伴わないグループに分かれる。前者は少人数ではあるが、規範を大切だと思っていないため行動できない実態から、規範の存在を日常生活の中で個別に気付かせていく必要がある。多くが後者にあたり、「やってはいけないこと」「やった方がいいこと」と知識として分かっているが、規範に対する意識が十分に内面化されておらず、規範の価値基準が他律的なものになっていると考える。特に4ページ図3から「規則尊重・公德心」「公正公平・正義」の内容項目にかかわる規範意識と規範を守る行動に開きがあることは課題である。また、5ページ表4から「規則尊重・公德心」において、意識は高いが行動が伴わない児童が多いことも分かった。これらは、5ページ表5、図4から「基本的生活習慣」「思いやり」「勤勉努力・自律」「役割自覚・責任」の意識をはぐくみながら、ともに高まっていくものと考えられる。

意識、行動ともに「仲間はずれをしないこと」の数値が高かったが、「悪口を言わない」「いじめを注意する」項目で意識と行動に差があることから、根本的ないじめ問題の解決には至っていないことが分かる。

2 児童の道徳の時間における意識から

(1) 各質問項目の割合及び χ^2 検定の結果（資料編E参照）

児童の道徳の時間の意識から、道徳の時間に友達の考えを聞いて、はっとしたり、なるほど思ったりしたことがある児童は90%いる（図5）。また、道徳の時間を大切に感じている児童も85%と多い。

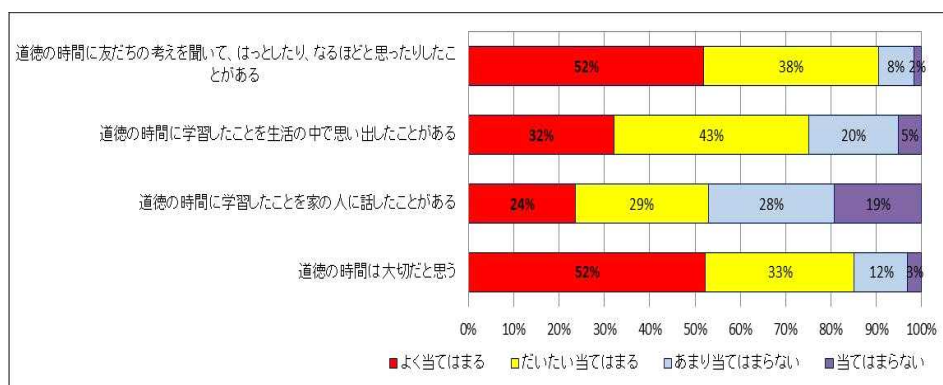


図5 児童の道徳の時間における意識の割合

そこで、規範を内面化している児童と内面化していない児童では、道徳の時間における意識に違いがあるかを調べた結果が表6である。規範を内面化している児童は、質問項目すべてに「よく当てはまる」が有意に多く、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」が有意に少なくなっている。逆に規範を内面化していない児童は、どの項目においても「よく当てはまる」が有意に少なく、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」が有意に多くなっている。傾向の違いをみる検定結果からも、規範を内面化している児童は内面化していない児童より、道徳の時間に学んだことを生活の中で思い出したり家で話したりする傾向があることが明らかになった。逆に、生活の中で思い出したり家で話したりする児童は、規範が内面化される傾向にあることも分かった。

表6 規範の内面化による児童の道徳の時間における意識 χ^2 検定

番号	質問項目	規範の内面化	よく当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	χ^2 値・Phi値
19	道徳の時間に、友だちの考えを聞いて、はっとしたり、なるほど思ったりしたことがある	している	387 ▲**	183 ▽**	16 ▽**	1 ▽**	$\chi^2(3)= 144.555$ Phi=0.413
		していない	66 ▽**	142 ▲**	45 ▲**	6 ▲**	
20	道徳の時間に学習したことを生活の中で思い出したことがある	している	241 ▲**	264 +	72 ▽**	10 ▽**	$\chi^2(3)= 108.839$ Phi=0.358
		していない	41 ▽**	103 +	93 ▲**	22 ▲**	
21	道徳の時間に学習したことを家の人に話したことがある	できる	180 ▲**	192 ▲*	139 ▽**	76 ▽**	$\chi^2(3)= 73.485$ Phi=0.294
		できない	25 ▽**	63 ▽*	98 ▲**	73 ▲**	
22	道徳の時間は大切だと思う	できる	383 ▲**	167 ▽**	34 ▽**	5 ▽**	$\chi^2(3)= 116.326$ Phi=0.370
		できない	74 ▽**	118 ▲**	58 ▲**	9 ▲**	

p<.01

(2) 重回帰分析からわかる道徳の時間における意識の影響の仕方

図6は、6ページ表6にある質問番号19～22の道徳の時間における意識の影響関係と影響度を見るため重回帰分析の結果を図に表したものである。「友達の意見が参考になる」と「道徳の時間に学んだことを生活の中で思い出すこと」が、標準回帰係数が高いことからお互いに強く影響を及ぼし合っていることが分かる。また、この二つの事柄は「道徳を大切に思うこと」とも強く影響し合っている。「学んだことを生活の中で思い出すこと」と「学んだことを家で話すこと」も、お互いに影響を及ぼし合っていることが明らかになった。

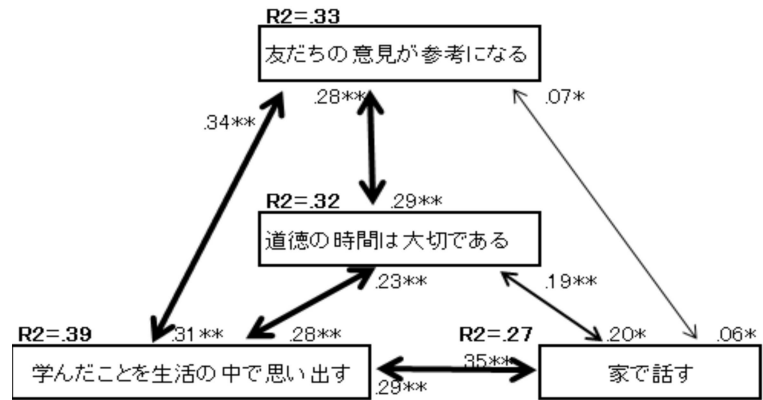


図6 道徳の時間における意識の影響関係と影響度（パス図）

注：→は影響を及ぼす、↔は、影響を及ぼし合う関係を表している。

数値は標準回帰係数であり、影響を与える強さを表す。値が大きいほど影響が強い。*よりも**の方が影響を及ぼす可能性が高い。

(3) 考察

表6、図6から、道徳の時間に友達との対話を取り入れ心に響く授業を行うことで、学んだことを生活の中で思い出しやすくさせ、規範の内面化を促すことがわかった。また、道徳で学んだことを家庭で会話することで学び直しができ、生活の中で思い出しやすくなり規範を守る行動に移せるようになると考えられる。学習指導要領においても、家庭や地域との連携を明記している。学年・学級通信の発行や公開授業を通して、家庭と共通理解を深め相互の連携を図ることが児童の規範意識を高め、規範を守る行動につながるということが明らかになった。道徳の時間に友だちの意見を参考にしていることから、役割演技や動作化、話し合い活動などが他者とのかわりにおいて有効であるといえる。その時、各自が自分の考えをもち他者との交流を通して自己開示し、今の自分を見つめ直したり、再確認したりすることが重要であると考えられる。しかし、学級全体では意見が出しにくい児童がいる。そうした児童への配慮として少人数による話し合い活動を取り入れることは、一人一人が自己の価値観のよさや他者の価値観との違いに触れ、自己の価値観を見直すことができる有効な方法と考える。

多くの児童が、道徳の時間を大切な時間ととらえている。教師は道徳教育の要としての道徳の時間を生き方についてみんなで考える時間とし、心を育てていくことが大事である。そして、道徳の時間を1時間の授業だけで終わることなく、事後指導において意図的・計画的に学んだことを振り返る場面を設定することは、児童に自分の成長を実感させるのに有効であると考えられる。

3 教師の道徳の時間における指導方法の有効性と実現度から

(1) 割合でみる規範意識をはぐくむための指導方法の有効性と実現度（資料編G・H参照）

規範意識をはぐくむために有効であると感じる指導方法と実際行っている指導の比較から、規範指導の有効性と実現度の差が激しい3項目を取り上げた。

90%の教師が、地域の人や教職員などのゲスト・ティーチャーに日頃の子どもの規範行動について語る場を設けることを「有効である」「どちらかといえば有効である」と答えているが、実際行っている教師は10%に満たない（図7）。

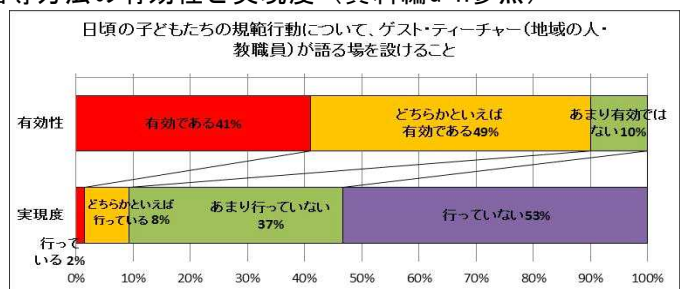


図7 ゲスト・ティーチャーの活用の有効性と実現度

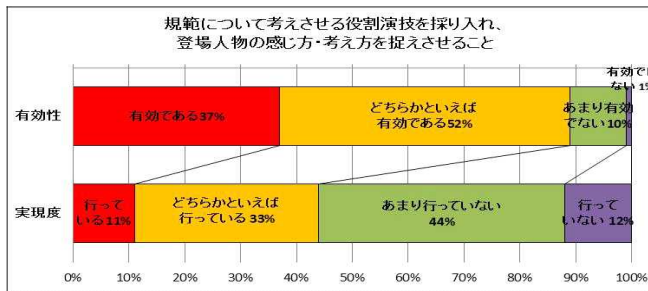


図8 役割演技の活用の有効性と実現度

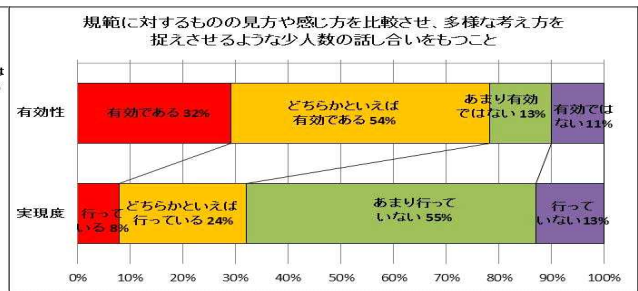


図9 少人数の話し合いの活用の有効性と実現度

役割演技を取り入れ、登場人物の感じ方や考え方をとらえさせることも「有効である」「どちらかといえば有効である」と答えている教師が90%いるが、実際に行っているのは、44%である（図8）。学年別に見ると低学年がそのうちの約半分を占めている。高学年になると1/5に満たない。

少人数による話し合いを「有効である」と答えた教師は、32%で最も低く、「どちらかといえば有効である」とあわせても86%と他の項目と比べ低い割合になっている。実際に行っている教師も32%とゲスト・ティーチャーの活用に次いで低い結果となっている（図9）。

(2) 考察

道徳編において、道徳の時間の指導に当たっての配慮事項の1番目に、「校長や教頭などの参加、他の教師との協力的な指導などについての工夫」を示している。また、「家庭や地域社会との連携」として、道徳の時間への積極的な参加や協力を得ることの効果を挙げている。ゲスト・ティーチャーを招いて道徳の時間を進めるには、まずは、身近な学校職員、例えば校長や教頭などに日頃の児童の規範行動に関する話を授業終末にしてもらおうと有効である。

役割演技や動作化など表現活動を取り入れて指導を工夫、充実させることがますます求められている。調査結果から、取り入れている教師の半分が低学年の担任だったことから、発達段階から考えて低学年には取り入れやすいが、学年が上がるほど難しさを感じていると考えられる。

また、規範をはぐくむ指導に少人数の話し合いが「有効でない」または「行っていない」と答えた教師は、きまりは守るものと考え、多様な価値に児童の意見が広がることを嫌ったのではないかと考える。ねらいとする価値に到達できるように学級全体で話し合うことは、75%の教師が行っている。少人数での話し合いは、有効性を感じている教師が他の指導方法に比べ低いとはいえ8割を超える教師が「有効である」「どちらかといえば有効である」と答えている。また、少人数での話し合いを取り入れた教師はすべて、少人数の話し合いを「有効である」「どちらかといえば有効である」と答えていることから、規範指導に有効な少人数での話し合いの方法を提言する必要がある。

4 道徳の時間における児童の規範意識をはぐくむ意識の高い教師の指導の実施状況から

(1) 道徳の時間における指導の実態からみる児童の規範意識をはぐくむ意識の高い教師

本研究でいう道徳の時間における児童の規範意識をはぐくむ意識の高い教師とは、約束やきまりは守るべきものという指導（規範の理解）だけでなく、規範を守ること、よりよい人間関係や集団生活を送っていきけるようにすることを目的とし、約束やきまりを大切にする生き方を児童の発達の段階に合わせながらその意義を考えさせる（規範の納得）ことを重視している教師とした。「規範の理解」を重視している教師377人中101人（27%）、「規範の納得」を重視している教師377人中276人（73%）であった。なおかつ、今年度に行った規範にかかわる道徳の時間において、児童が主体的に規範の価値について考えを深められるよう教材研究を十分行っており、規範について道徳の時間で扱った後、児童の発言や行動に明らかな変容がみられたと答えた177名を道徳の時間に規範意識をはぐくむ意識の高い教師とした。

(2) χ^2 検定の結果からみる意識の高い教師が行っている指導方法（資料編1参照）

χ^2 検定から、道徳の時間において児童の規範意識をはぐくむ意識の高い教師が行っている指導方法を9ページ表7にまとめた。児童は、日常生活や体験活動を通して他者とかわりながら様々な規範に触れ生活している。その児童の実態を踏まえ、導入に、想起させる場面を積極的に取り入

れていることが「規範にかかわる児童の実態をとらえた上で、道徳の授業を行うこと」「導入に日常生活や体験活動等における規範を想起させるような場面を取り入れること」を「行っている」教師が有意に多いことから明らかになった。規範の必要性を考えさせたり、葛藤場面において主人公の心情の揺れ動きを考えさせたりする発問の工夫が有意に多くなっている。また、話し合い活動や書く活動

も有意に多くなっている。「悩みや葛藤等の心の揺れが生じ、規範について深く考えることができる資料を提示すること」「規範の必要性を他者の立場になって考えさせること」「展開後段に、規範を守ることができた時の理由や気持ちを見つめ直す場面を取り入れること」も「どちらかといえば行っている」が有意に多くなっており、「規範の理解」を重視した教師は、この項目が有意に少ないことから、あまり重視していないと考えられる。

表8は、表7を低・中・高学年別にみて指導の方法に大きな違いがあった質問項目である。話し合いは高学年でよく取り入れている指導方法で、役割演技は低学年でよく取り入れている指導方法であることが分かる。

(3) 考察

役割演技の活用は有意に少なくなっているが、低学年と高学年で活用に差があるため全体の結果では、有意に少なくなっていると考えられる。低学年では、文章や言葉で説明されたものだけでは、場面の様子や登場人物の気持ちを理解できない児童が多いため、身体を使って自分の考えや感じ方を表現し、体感を通して深めて行く役割演技や動作化は有効な指導方法であるとする。児童の発達段階を考慮して、話し合うことより体で感じたり行動したりすることを指導に取り入れていると考える。

『心に響く道徳教育の創造』の中で、「道徳の授業で学習する道徳的場面・状況と児童が日々の生活において自覚的にでくわす道徳的場面・状況との類似性を理解すればするほど、道徳の授業での学習成果は児童の日常生活に自然と生きてくるようになる。その結果として、道徳的実践力が育成されることになる」とある。道徳の時間における児童の規範意識をはぐくむ意識の高い教師が、児童の実態をとらえ、資料や導入に工夫を凝らしたため、授業後の児童の発言や行動の変容につながったのだと考える。また、児童の内面に働きかける発問を工夫し、規範の意義を書くことや役割

表7 規範意識をはぐくむ意識の高い教師が行っている指導

規範指導質問項目	行っている	どちらかといえば行っている	あまり行っていない	行っていない
規範に関わる児童の実態を捉えた上で、道徳の授業を行うこと。	82 ▲**	89	5 ▼**	1 ▼**
悩みや葛藤等の心の揺れが生じ、規範について深く考えることができる資料を提示すること。	36 ▼**	99 ▲**	38	4 +
規範の必要性を考えさせるような発問をすること。	64 ▲*	103 ▲**	9 ▼**	1 ▼**
主人公のとった行動に対して、規範に関わる考え方や感じ方の根拠や理由を明確にできるように発問をすること。	45	111 ▲**	18 ▼**	3 *
主人公がとった規範に関わる行動を、自分の体験におきかえて、考えさせるような発問をすること。	80 ▲**	81	11 ▼**	5
葛藤場面において、主人公の心情の揺れ動きを自分におきかえて、気持ちを考えさせるような発問をすること。	69 ▲**	89	12 ▼**	7
規範に対するものの見方や感じ方を比較させ、多様な考えを捉えさせるような少人数の話し合いをもつこと。	21 ▼**	41 ▼**	99 ▲**	16 ▲**
ねらいとする規範の価値に到達できるように、学級全体で話し合うこと。	74 ▲**	86	15 ▼**	2 ▼**
規範について、自分の考えや気持ちを書く活動を取り入れること。	77 ▲**	80	16 ▼**	4 +
規範について考えさせる役割演技を取り入れ、登場人物の感じ方・考え方を捉えさせること。	30 ▼**	57 ▼**	75 ▲**	15 +
規範にかかわる教師の体験を説話として、児童に語って聞かせること。	53	95 ▲*	28	1 ▼**
導入に、日常生活や体験活動等における規範を想起させるような場面を取り入れること。	84 ▲**	79	12 ▼**	2 ▼**
規範をわかっているにもかかわらず守れない人間の弱さについて考えさせる場面を取り入れること。	29 ▼**	89	50 ▲**	9
規範の必要性を他者の立場になって考えさせる場面を取り入れること。	42 +	100 ▲**	32 +	3 ▼*
日頃の子どもの規範行動について、ゲスト・ティーチャー(地域の人・教職員など)が語る場を設けること。	4 ▼**	13 ▼**	82 ▲**	78 ▲**
展開後段に、規範を守ることができたときの理由や気持ちを見つめ直す場面を取り入れること。	37 ▼*	96 ▲*	40	4 +

x2(45)=1207.914 , p<.01 n=177
Phi=0.377

表8 学年別にみた指導方法

ねらいとする規範の価値に到達できるように、学級全体で話し合うこと

	行っている	どちらかといえば...	あまり行っていない	行っていない
低学年	13 ▼**	34 ▲*	7	1
中学年	29	28	4	1
高学年	32 ▲*	24	4	0

x2(6)= 12.399 , .05<p<.10
Phi=0.187

規範について考えさせる役割演技を取り入れ、登場人物の感じ方・考え方を捉えさせること

	行っている	どちらかといえば...	あまり行っていない	行っていない
低学年	17 ▲**	27 ▲**	9 ▼**	2
中学年	10	20	29	3
高学年	3 ▼**	10 ▼**	37 ▲**	10 ▲**

x2(6)= 42.344 , p<.01
Phi=0.345

演技や動作化、話し合い活動を通して、自己や他者と対話することで自分自身を振り返り、自らの価値を見つめ直させている。学習指導要領においても言葉の役割や自分の考えをもとに表現する機会の充実の重要性が述べられている。児童の調査結果からも友達の意見を参考にしていることから話し合い等の交流活動は内面化に有効な手段であることが明らかになった。そして、他者の立場になって規範を考えさせるなど他者意識を高めた指導をしている。これらのことから、他者とのかかわりを意識させ規範の内面化を図るという本研究仮説を検証することができた。

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

本調査研究を通して、児童の規範意識と規範を守る行動の結果から規範の内面化の実態を明らかにすることができた。「規則尊重・公徳心」「公正公平・正義」の内容項目に課題があること、そして、規範意識は六つの規範に関する内容項目をバランスよく指導することで高まることである。また、児童の道徳の時間における意識と規範意識をはぐくむ意識が高い教師の指導方法の実態から、他者とのかかわりを意識させ規範の内面化が図られることを明らかにすることができた。

2 提言

規範に関する内容項目を取り上げる道徳の時間では、他者とのかかわりを意識させた指導を行いましょう。

- 問題意識をもたせましょう。日常生活や体験活動における規範に関する学びと結びつけて考えさせることで、自分とのかかわりで規範の価値を深めることができます。
- 相手の立場で考えさせましょう。その時、低学年は役割演技や動作化、中・高学年は少人数や学級全体での話し合いの場を充実させることで、友達の考え方や感じ方を受け入れ、自らの価値観を見つめ、見直すことができます。
- 今までの自分の行動や考えを振り返らせ、書く活動等を取り入れ他者とよりよく生きるための規範の意義やよさを再確認し、自己の生き方についての考えを深めさせ実践意欲をもたせましょう。
- 道徳の時間の事後指導において、意図的・計画的に学んだことを振り返る場面を設定し、児童が自分の成長を実感できるようにしましょう。
- 日常生活において規範の存在に気づかせ、規範を守ることを大切にする学級風土をつくりましょう。

3 課題

- 規範の内面化を図るため、役割演技や動作化、話し合い活動などの表現活動を取り入れた具体的な展開例を提案していく必要がある。
- 道徳の時間において、各教科や日常生活・体験活動における学びをつなげ深化させることで、自分とのかかわりで価値を深められること、学び直すことで規範が定着することから、道徳の時間との効果的な関連を授業実践によって検証する必要がある。

<参考文献>

- ・広島県三原市立中之町小学校 編著 『心に響く道徳教育の創造』 三省堂(2010)
- ・赤堀博行 著 『道徳教育で大切なこと』 東洋館出版社 (2010)
- ・前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編 『エスノメソドロギー 人々の実践から学ぶ』 新曜社 (2007)
(第5章 小宮友根「規範があるとは、どのようなことか」)
- ・上杉賢士 編著 『道徳授業で育てる確かに学ぶ力』 明治図書 (2008)
- ・『児童心理 1月号』 滝充 著 「子どもの規範感覚を育てる」 金子書房(2012)